

○ 2 真脇遺跡出土イルカ頭蓋骨の空間分析

○平口哲夫（金沢医科大学）

A space analysis of dolphin craniums found at the Mawaki site in Noto, Ishikawa prefecture.

○Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University)

筆者は、1983 年度真脇遺跡発掘調査で出土したイルカ骨について、耳周骨と鼓室胞の接合関係、耳周骨のペアマッチング、ならびに頭蓋骨と耳周骨の出土状況などを検討し、H24 グリッドにおいて並んで発見された 2 個体のカマイルカ頭蓋骨が意図的に（おそらく祭祀的な目的で）並べられた可能性が高いと指摘したことがある（平口，1997）。この研究は、真脇遺跡出土イルカ骨を対象に行った、計測値と非計測的形質による個体別分析の一環をなす。個体別分析は、空間分析に必要なデータを提供し、タフノミー、遺物の共伴関係、個体数の計算、捕獲・解体・分配過程などにおける様々な問題解決に役立つ。カマイルカ頭蓋骨の並列配置例についての考察も、個体別分析をふまえた空間分析の結果であるといえる。今回は、空間分析という観点から若干の補足説明を行うことにしたい。

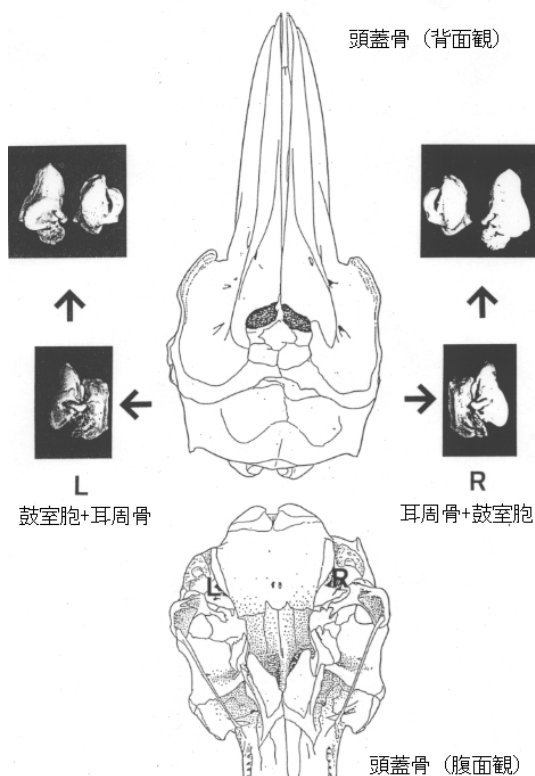


図 1. カマイルカ頭蓋骨・耳周骨・鼓室胞の分離過程(平口，2005)

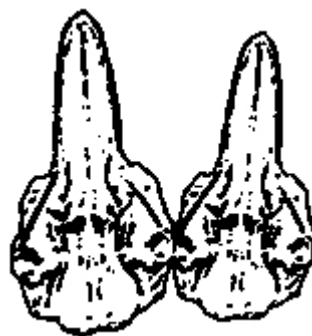


図 2. 1982 年度真脇遺跡発掘調査出土カマイルカ頭蓋骨並列配置例の復元図(平口，2003)：50 cm 方眼グリッドの H24 において、口ばしを東方向に向け、頭蓋底を下にした状態で出土。解体直後にこの状態で捨てたものならば、軟部組織が腐ったあとでも耳周骨・鼓室胞は頭蓋底に密着して出土していいはずだが、このグリッドからは耳周骨・鼓室胞はまったく出土していない。ゆえに、この二つの頭蓋骨は、耳周骨・鼓室胞が本体から遊離したあと、どこからか運びこまれた可能性が高い。